

## 福岡大学病院救命救急センターに搬送された 自殺未遂者の家族の心理的状態の経時的変化と 心理教育介入の効果に関する研究

原田 康平<sup>1)</sup> 衛藤 暢明<sup>1)</sup> 本田 洋子<sup>1)</sup>  
河野 直子<sup>1)</sup> 松尾真裕子<sup>1)</sup> 吉村 裕太<sup>1)</sup>  
吉良健太郎<sup>1)</sup> 大串 祐馬<sup>1)</sup> 梅村 武寛<sup>2)</sup>  
村井 映<sup>2)</sup> 石倉 宏恭<sup>2)</sup> 西村 良二<sup>1)</sup>

- 1) 福岡大学医学部精神医学教室  
2) 福岡大学医学部救命救急医学講座

**要旨：**背景：自殺企図は本人だけでなく家族にも深刻な影響を与えると言われている。しかし、家族の精神状態や有効な介入法については十分に検証されていない。そこでわれわれは、福岡大学病院救命救急センターに搬送された自殺未遂者の家族の心理状態についての評価を行い、家族への心理教育の効果を検証した。

**目的：**自殺未遂者の家族の1) 不安、抑うつ、心的外傷性ストレス症状の精神症状の評価（第一部）、2) 家族用の心理教育の効果を明らかにすること（第二部）を目的とした。

**対象と方法：**当院救命救急センターに搬送された自殺未遂者の家族のうち、平成25年5月から10月までの53名を心理教育を行う試験介入群とし、平成25年11月から平成26年5月までの28名を通常介入群とした。第一部では搬送直後の自殺未遂者の家族の自殺企図手段、家族の年齢、性別、第一親等か、第一発見者か、精神科既往歴、不安（State-Trait Anxiety Inventory, STAI）、抑うつ（Self-rating Depression Scale, SDS）、心的外傷性ストレス症状（Impact of Event Scale-Revised, IES-R）を横断的に評価した。第二部では試験介入群は心理教育を行い、両群とも1、3ヶ月後にフォローアップし縦断的な評価を行った。

**結果：**第一部では第一親等は非第一親等よりもSTAI状態不安、IES-R合計、IES-R侵入症状について、第一発見者は非第一発見者よりもSTAI状態不安、IES-R侵入症状について有意に高い得点を示した。第二部では繰り返しのある二元配置の分散分析にて通常介入群（20名）と比較して試験介入群（47名）ではSTAI状態不安、SDS、IES-R合計得点のいずれも有意差を認めなかった。第一親等に当てはまる家族（試験介入群N=33、通常介入群N=15）を抽出し層別解析を行ったところ、通常介入群と比較して試験介入群ではSTAI状態不安（df=1, 46, F=4.582, p<.05）の群間の主効果において有意な低下を認めた。下位検定では、1ヶ月後において（46.4±7.8, 54.1±12.7, t=2.570, p<.05）有意な低下を認めていた。

**結論：**自殺未遂者の家族の搬送直後の心理状態に関しては第一親等、第一発見者の方がそうでない家族よりも重篤な反応を示していた。心理教育介入に関しては全対象者においては通常介入群に比べて試験介入群は精神症状の有意な改善を認めなかった。しかし、第一親等のみに対して層別解析を行った場合は心理教育介入の効果として1ヶ月後という早期の不安を軽減する可能性が示唆された。

**キーワード：**救命救急センター、自殺企図、家族支援、心理教育